

## 転用の考古学

### *The Archaeology of diversion*

齊藤 基生 *Motonari Saito*  
(美術学部)

#### はじめに

本学で考古学を担当し始めたのは、2003 (H15) 年 4 月からである。当初は美術学部美術文化学科の 2 年生以上に限定しており、そのためしばらくは 10 名前後しか履修していなかった。その後学部の改組が進み、2009 年には 2008 年度入学生から美術・デザイン両学部全体に向け開講されたが、周知期間が短く 20 数名に留まった。翌 2010 年度は 100 名を越す履修届けがあった。学生数が増えたことで、少人数ならではのきめの細やかさは失われたが、その代わり考古学に対する多様な反応が得られるようになった。

本稿の目的はそれら一つ一つを検証するものではないが、本題に入る前にいくつか誤解を解いておく。学生が一番多い誤解は、化石、特に恐竜の化石も考古学の範疇に入れていることである。確かに、「発掘」という作業は共通するが、考古学の研究対象は、あくまでも人との関わりが認められる「モノ」に限定される。これに関連し、考古学の研究対象とする時代の幅も誤解されている。今述べた様に、考古学は人と関わりのあるものを対象としており、その上限は人類誕生であり、下限はつい今し方までといえなくもない。

今から半世紀ほど前、一般には日本の考古学といえば縄文時代から古墳時代、せいぜい古代の一部ぐらいまでの、主に文字のない時代が対象とされてきた。1950 年の岩宿遺跡発掘を契機に上限は縄文時代を遥かに遡り、一方下限は古代はもちろん、中世・近世は言うに及ばず、明治維新前後の産業遺跡、さらには第二次世界大戦に関わる戦跡も考古学的手法による研究対象に取り込まれている。

文字のない時代に限定する考えは、まったく通用しない。文字のある時代だからといって、記録に書き記されているのは、長く広い歴史のほんの一部に過ぎない。名もなき庶民の歴史が文字記録に残ることは減多になく、発掘によって掘り出された情報に勝るものはない。残されたモノを相手にするだけに、それが考古学の強みでもあり、弱点でもある。

話は変わり、過去を対象とする「考古学」に対して、同時代を対象とする「考現学」という研究分野がある。両者は無名の人々の日常を研究する、という共通点がある。ただ、考古学では手がかりが残されたモノに限定されるのに対し、考現学では形のない情報も収集できるので、研究対象や手法は比較にならないほど多様である。その考現学の研究の一つに「転用」がある。その視点を考古資料に適応し何が言えるか、以下述べる。

## 1 転用とは何か

考現学は明治時代、<sup>こん</sup>今和次郎により提唱され、実践されてきた。以後、あらゆる「<sup>いま</sup>今」が採取されてきたが、その中の一つに転用物がある。転用の実例はフィールドワークをする人、考現学採集者により多数報告されている。最近では、名古屋を拠点として活発な活動を続けている『野外活動研究会』の成果がある。

転用とは何か、野外活動研究会の一員である平田哲生は採集活動を続ける中で「ものはその製作者や、デザイナーがその使用目的、使用状況を設定して使われるのがふつうです。ところが街の中、生活の現場をフィールドサーベイしてみると、それら設定された使用目的、状況と異なる使われ方をしているものをたくさん目にします」と気づいた。そしてこれを踏まえて、転用を「ものを考えた人、作った人が最初に意図した使い方と実際の使い方が異なっているとき、これを「モノの転用」と呼ぶことにします。」と定義づけた。

さらにモノの転用を整理するために、使われている状況や形状から、一-塊、二-棒、三-紐、布、四-器、五-板、六-その他の六つに分けた。そして、道具の発生と転用、モノのおおらかさ、ゆれもどし、農村と漁村の転用、デザインと転用、歴史を語る転用、転用の実例-重し、貧乏暮らしの知恵、の各項目で豊富な事例を図示しながら、転用のあり方を紹介している<sup>(1)</sup>。以下、必要に応じて、順次その中から引用する。

## 2 考古資料における転用

平田の定義に従えば、そのモノが転用されているか否かは、製作者やデザイナーの本来の意図が分らなければ判断できない。考現学では同時代が対象だけに、採集者はほぼ間違いなく本来の意図を汲むことができ、だからこそ転用を認定できる。ところが考古資料の場合は、対象が過去だけに、製作者の意図はもちろん、使い手の意図も後世の我々の判断にゆだねられる。そのため、どこまでが本来の使われ方で、どこからが転用なのかを見極めるのは、極めて難しい。

ところで、平田はモノのおおらかさの項で「道具の始まりにおける多目的性と、その後の単一目的化」について触れている。具体的には、水を汲むための一般的な道具であった柄杓が、生活様式の変化とともに台所から姿を消し、今では茶道具の一つとしてのみ姿を留めている例を挙げている。とても考古資料ではこうしたレベルまで解明することは不可能である。ただ石器に関しては、より古い時代ほど多目的性を持ち、時代が下るほど単一目的化する傾向はあるかもしれない。単一目的化すれば、転用を認め易い。

考古資料の転用について造詣の深い領塚正浩は、用語を以下の様に定義している<sup>(2)</sup>。

一つの道具は、ある目的のもとに製作・使用されるが(一次利用)、目的の途中で破損したり、目的が達成されると、しばしば異なった目的のために、異なった道具として使用されることがある。また、食用に入手した動物の身体の一部(骨・角・牙・貝殻など)を加工し、道具として使用したものがある。小稿では、このような場合を道

具や食料資源の「二次利用」または「転用」と定義する。現代社会では、「リユース」や「リサイクル」などの用語も使用されているが、「リユース」は同じ目的で同じ道具（またはその部品）を再び利用すること、「リサイクル」はゴミなどの廃棄物・不用品の再資源化・再生利用を意味することから、小稿では混乱を避けるために、この二つの用語をあえて使用せず、これからの話を進める。

ここでは、平田・領塚の見方を踏まえつつ、考古資料の転用を考える前提として、まず出土品を大きく実用品と非実用品分ける。そもそも実用とは、広辞苑によれば「実地に用いること。実際に役に立つこと。」とされている<sup>(3)</sup>。ところが、考古資料における実用・非実用の判断は、とても当時の人々の心のありようは分からず、しょせん現代人である我々の感覚で区別するしかない。そのため、転用であるか否かの見方も彼我で完全に一致している保証はない。

ひとまず、実用品とは、狩猟や漁撈、採集、栽培などの生産に直接関わる道具類、機織りなどの軽工業に関わるもの、道具作りのための道具、日常生活の必需品、建築部材など、即ち目に見える形での実利が得られるものとする。それに対し非実用品は、具体的な実利が得られなくても、精神的なもの、心に働きかけたであろうものを一括する。

実は、考古資料は年代を遡れば遡るほど、使用目的が現代人には分からないものも多く、それらを安直に祭祀に関わるもの、非実用品と分類しがちである。なお、考古学の用語として素材別に、実用品を土器、石器、木器、骨角器などと呼び、非実用品を土製品、石製品、木製品、骨角製品などと呼び分けている。

以下、現代人の感覚でもより確実に転用と認められる事例を、素材や器種ごとに、どう転用されたか見ていく。今回は転用事例の紹介が目的であり、集成を目指してはいない。そのため自分が関わった調査事例が主で、地域的な偏りや多くの遺漏があることをあらかじめお断りしておく。なお、各個別器種に関する詳細な説明は省略する。詳しくは、原著を参照されたい。また、対象とする時代は、縄文時代から中世ぐらいまでとする。

### 3 実用品から実用品へ

#### 1) 焼き物類

図1-1は、縄文時代中期、新潟県津南町八反田遺跡12号住居の複式炉(A)、埋設土器(B)、埋め甕(C)である。物を煮炊きする道具である深鉢が、それぞれ石囲い炉の燠の入れ物、何かの入れ物、再生を願う胎盤など出産に関わる物の入れ物に転用されている。なお、複式炉の燠入れ土器の中心軸は、燃焼部に向かって傾斜する特徴がある。

同2は、縄文時代中期、岐阜県美濃加茂市仲迫間遺跡1号住居の石囲い炉である。イロリの底に、深鉢3个体分の胴部破片が4~5cm大に割られて敷きつめられていた。

複式炉は、縄文時代中期、東北地方から北陸地方にかけて分布し、ドングリをはじめとする食用植物のアク抜き用の灰を確保する目的で作られたとされている。そのため、灰に

土などの不純物が混じらない様に、石や土器片を利用して丁寧にイロリを作る。

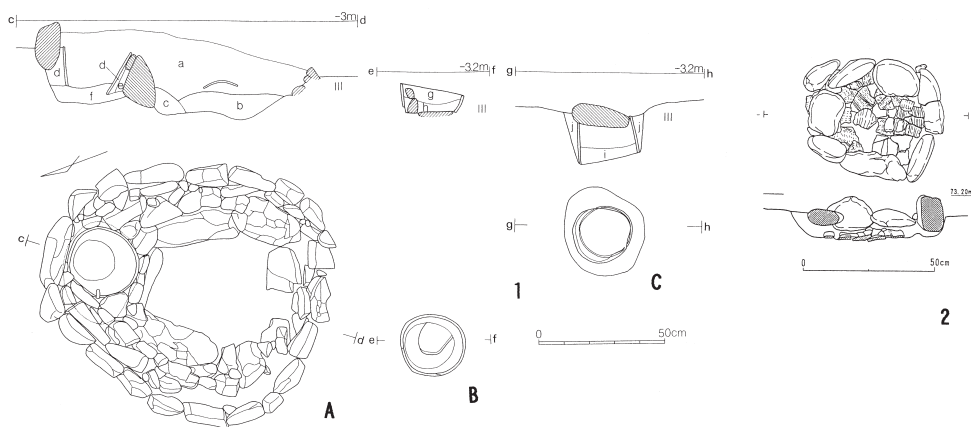


図 1 八反田遺跡 (1)・仲迫間遺跡 (2) 炉他実測図

図 2 は、縄文時代中期後半、千葉市加曾利貝塚出土の土器片錘である。深鉢形土器の破片を利用し、おおむね長方形に形を整え、長軸の両端に紐掛け用の刻み目を施す。煮炊きをするための器である深鉢形土器の破片が、砂地の遠浅の海での網漁に用いる網足に姿を変えている。土器が割れたから再利用したのか、土器片錘を作るためにあえて土器を割ったのか、定かではない。なお領塚は、市川市向台貝塚で中期の縄文人が前期の土器片を使用した可能性を紹介しており、土器片はゴミではなく「原材料」もしくは「資源」であったかもしれないとしている<sup>(4)</sup>。

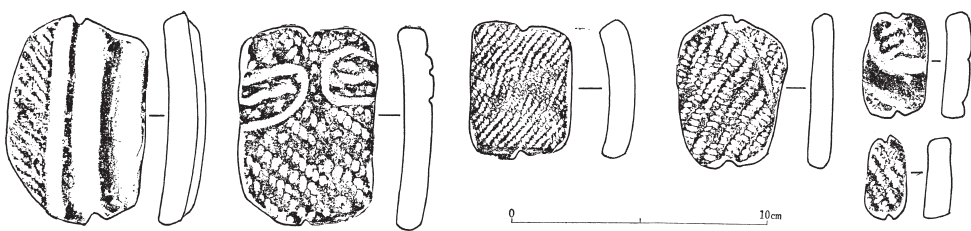


図 2 加曾利貝塚出土土器片錘

図 3 は、弥生時代、愛知県清須市朝日遺跡出土の紡錘車である。機織りが始まる弥生時代には、土製の紡錘車とともに、甕の胴部などの破片の周囲を打ち欠きや磨きによって円形に形作り、中心に穴を開けた土器片の転用品がある。これと似た形態のものは、縄文時代でも見られる。果たしてそれらも紡績用の紡錘車の未成品とするか否か見解は分かれるが、縄文原体が多様な「撚り」の産物であることは間違いない。

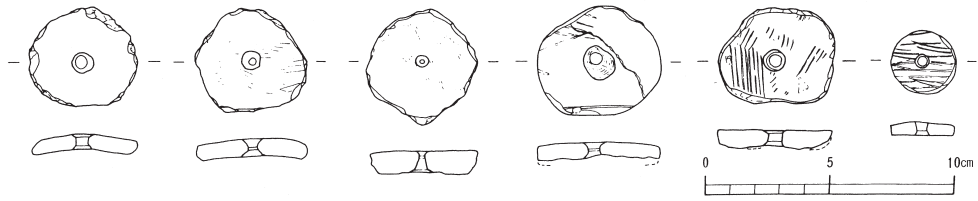


図3 朝日遺跡出土紡錘車

図4は、古代の役所、岐阜県垂井町美濃国府跡出土の転用硯である。文字の使用は古代から始まり、寺院や役所関連施設から多く出土する。風字硯や猿面硯と呼ばれる専用の硯もあるが、須恵器の坏や灰釉陶器の碗を転用した硯がある。美濃国府跡第10次調査では転用硯が406点出土し、うち墨付着208点、朱墨付着169点が確認された<sup>(5)</sup>。

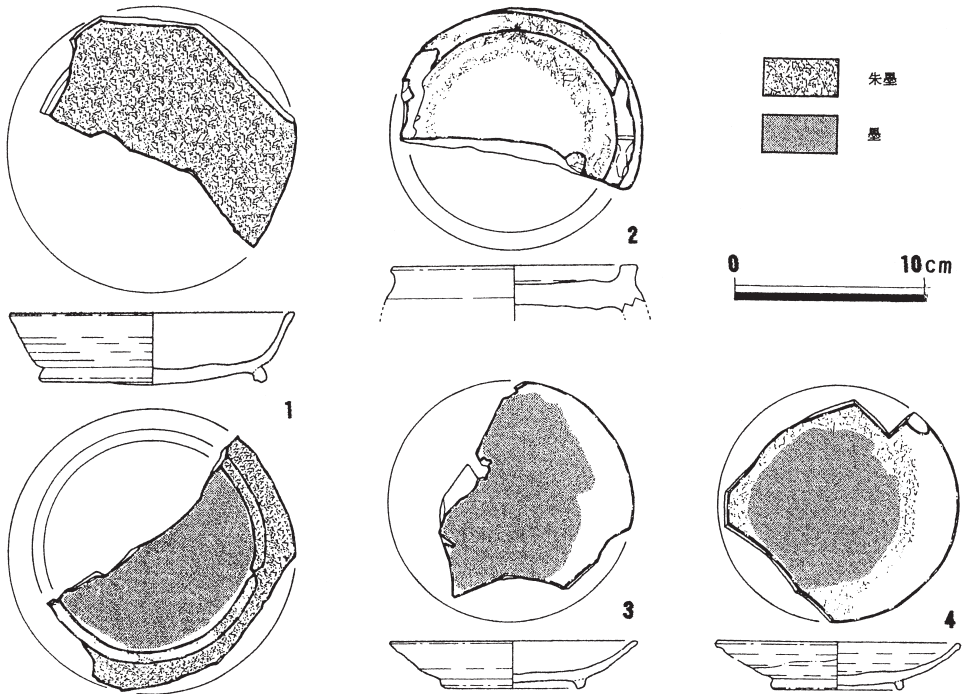


図4 美濃国府跡出土転用硯

## 2) 石器類

図5-1は、縄文時代後期、愛知県豊田市中川原遺跡出土。元の器種は、愛知県下一・二を争う非常に大きな切目石錘である。胴部に敲打による凹み、側縁部に敲打によるつぶれがある。凹みやつぶれ部分に水磨が見られないので、切目石錘からの転用と判断した。凹みのある面が滑らかなのが、転用のきっかけになった可能性がある。

同 2 は、縄文時代中期、東京都日の出町岳の上遺跡から出土。折れた乳棒状磨製石斧の胴部に、敲打が集中してできた凹みがあり、堅果類を割る敲石に再利用された。敲石の表面は滑らかなものが多く、磨製石斧の滑らかさが転用のきっかけになった可能性がある。

同 3 は、縄文時代中期、東京都小金井市貫井遺跡出土。やや角ばった乳棒状磨製石斧の折れたものだが、割れ口に敲打が集中しており、おそらく木材を割る際の「くさび」として再利用したと考えられる。同 4 は、縄文時代中期の小金井市貫井南遺跡から出土したくさびの類例で、3 と同様乳棒状磨製石斧を利用している。

同 5 は、縄文時代前期、岐阜県中津川市落合五郎遺跡出土。無柄石鏃の片方の脚が折れているが、残った脚部に回転による摩耗痕が見られ、石錐に転用されたと判断した。

同 6 は、縄文時代後期、中津川市久須田遺跡出土。打製石斧の破片を利用し、尖った先端部に摩耗痕があるので、これも石錐に転用されたと判断した。

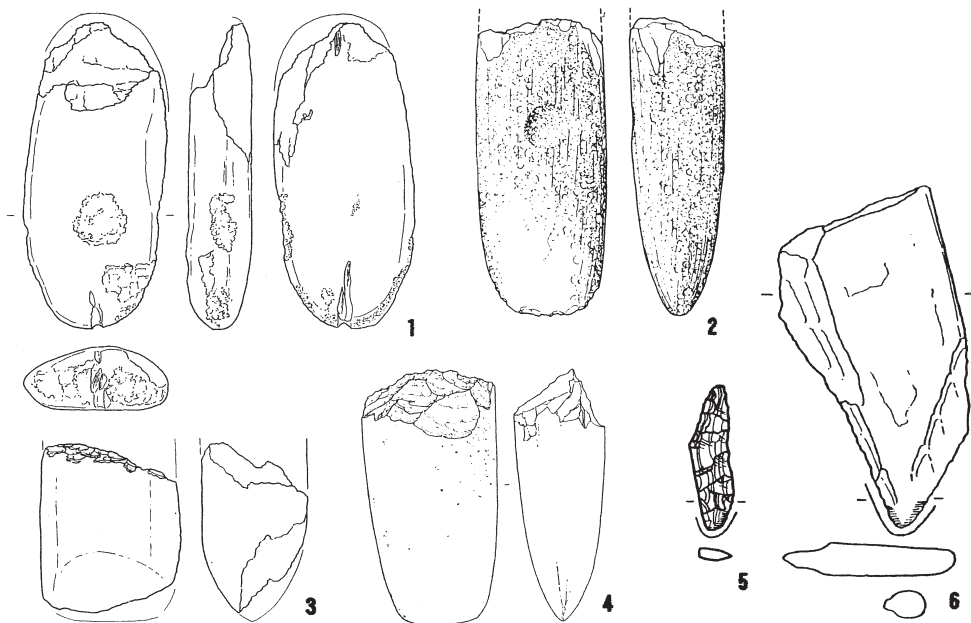


図 5 転用された様々な石器 (1~4 S : 1/3、5-6 S : 2/3)

#### 4 実用品から非実用品へ

図 6 は、前出落合五郎遺跡出土。1~5 は、深鉢形土器の破片を利用し、周辺を打ち欠きや磨きによって石鏃形に作りあげている。大きさ、強度、鋭さなど、とても実用には耐えない。同 6・7 は、同様に石匙形に作られている。

こうした土器片利用の他に、最初から石器を模して作った土製品もあり、一種の「形代」かもしれないが、具体的な使用目的や使用方法は何も分からない。

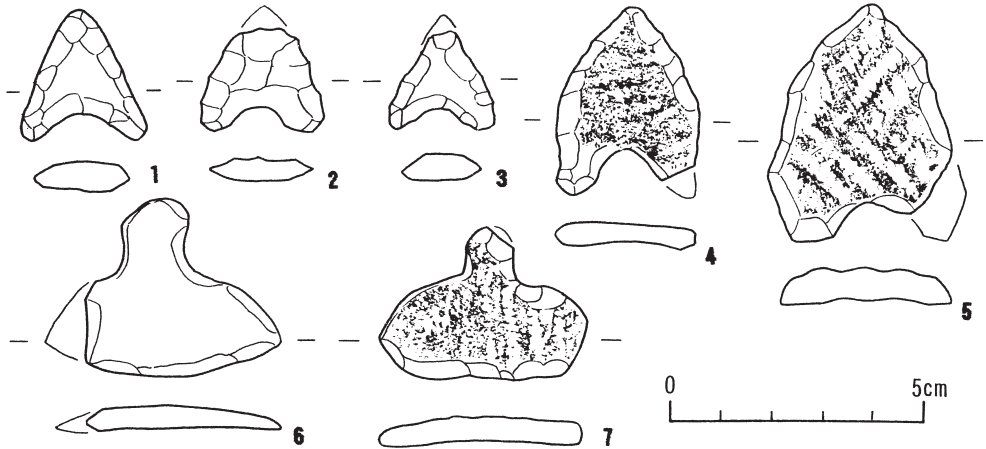


図6 落合五郎遺跡出土土器片鏃 (1～5)・土器片匙 (6・7)

図7は、縄文時代中期、岐阜県中津川市阿曾田遺跡出土。主に深鉢や浅鉢の胴部破片を利用し、打ち欠きや磨きによって円板状に仕上げたものである。縄文時代全般にわたって全国各地から出土しているが、具体的な使用目的などはよく分からない。

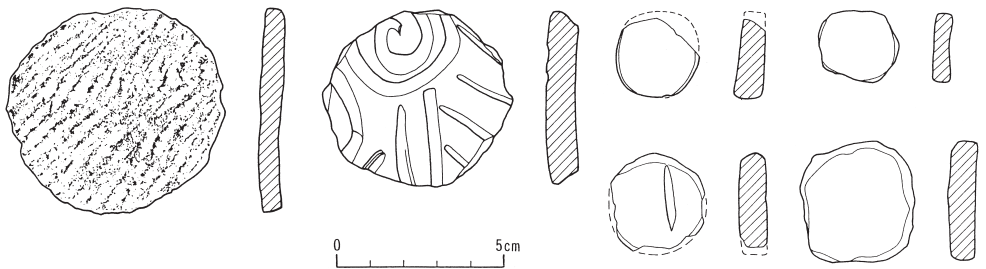


図7 阿曾田遺跡出土土製円板

図8は、愛知県清須市土田遺跡出土の、加工円盤である。灰釉系陶器の碗や皿の高台が付く、肉厚の部分を利用したものが多い。古代に始まり中世に続く、民衆の間で行われていた信仰あるいは年中行事に使われた「<sup>つぶて</sup>飛礫」と考えられている<sup>(6)</sup>。

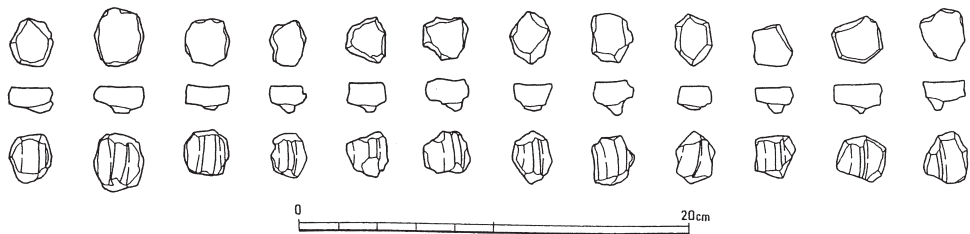


図8 土田遺跡出土加工円盤

## 5 非実用品から実用品へ

### 1) 土器類

図 9 は、奈良市秋篠・山陵遺跡出土の<sup>みずだめ</sup>水溜に転用された円筒埴輪である。角南・藤村は笠井敏光の先行研究を踏まえ、類例の多い埴輪棺を除いた例を集成した。その中で、葬送に関する a パターンと、竈の部材・井戸枠・水溜・土管の b パターンに二分し、転用される時間間隔を、50 年以内、50 年から 100 年、100 年以上の 3 期区分した。

両者を組み合わせた結果、製作から 50 年以内では埴輪本来の意味が重視され、葬送と関連した転用が見られる。一方、100 年を越すと本来の意味は失われ、瓦・塼と同様、火や水の利用と関係した部材として使用されることが多くなる、と指摘した<sup>(7)</sup>。

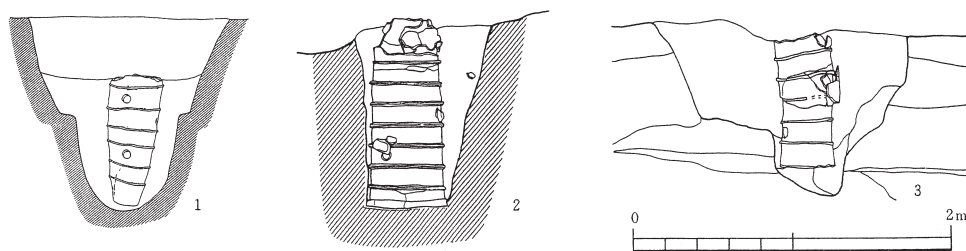


図 9 秋篠・山陵遺跡出土転用円筒埴輪

### 2) 石器類

図 10 - 1・2 は、縄文時代後期、岐阜県中津川市久須田遺跡出土。石棒の欠損品に紐かけ用の刻み目を施し、切目石錘に転用している。同 3・4 は、縄文時代後期、愛知県西尾市八王子貝塚出土。石刀の破片を切目石錘に転用し、おそらく接合する同一個体である。

石棒や石刀の意義や使用法などがよく分からないので、祭祀行為として折ったのか、偶然に折れた破片を利用したのか判然としない。仮に前者であるならば、一連の祭祀が終わり石棒や石刀としての意味が失われ、単なる石ころに戻った素材として選んだと考える。切目石錘は漁網の網足であり、水の抵抗が少ないにこしたことはなく、石棒や石刀の破片はそれにふさわしい形をしている。

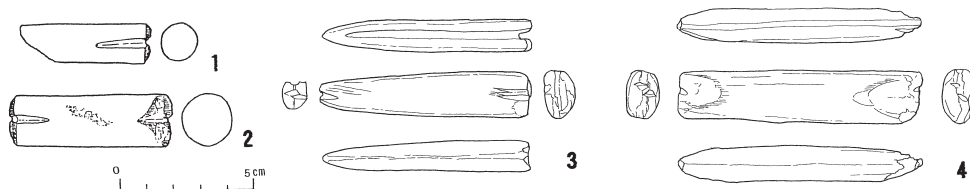


図 10 久須田遺跡 (1・2) 八王子遺跡 (3・4) 出土転用切目石錘



## 6 非実用品から非実用品へ

### 1) 石製品

図 11 は、縄文時代前期、前出落合五郎遺跡出土。縄文時代の装身具の一つに、玦状耳飾りと呼ばれるものがある（模式図参照）。現代のピアスとはやや異なるが、耳朶に穴を開け装着したと考えられている。これが何らかの理由で線対称に割れて（折られて）半分になったものに穴を開け、胸飾りなどの垂飾品に再加工されている。

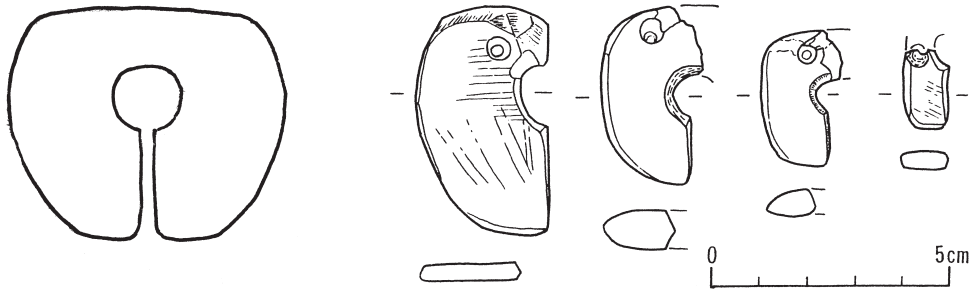


図 11 玦状耳飾り模式図および落五郎遺跡出土垂飾品

### 2) 金属製品

日本列島に青銅製の鏡が登場するのは弥生時代であり、中国大陸や朝鮮半島からもたらされた。その後、古墳から中国製や仿製鏡と呼ばれる国産の鏡が数多く出土している。青銅製の鏡は、現代の鏡の様に姿形を映す実用品ではなく、霊力を持った祭祀用具と考えられている。そして祭祀行為の一つに鏡を割ることがあり、その破片に穴を開け、垂飾りとする例がある。

図 12 は、弥生時代末から古墳時代初め頃の、岐阜県関市砂行遺跡<sup>すぎょう</sup>の住居内から見つかったものである。後漢の方格規矩四神鏡の破片の周辺が研磨され、欠損した辺に穿孔部が残る<sup>(8)</sup>。

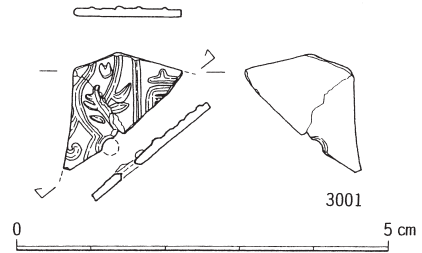


図 12 砂行遺跡出土破鏡

## 7 まとめ

今回は、実用と非実用を手がかりに、管見に触れるまま考古資料の転用事例を紹介した。そのため、事例報告の多い土器や土製品、石器や石製品はともかく、木器や骨角器、金属器などの転用例は少ない。また、土製品の非実用品から実用品へ、石器の実用品から非実用品への転用例は見つけられなかった。一方、木製品の建築部材への転用をはじめ、時代が下れば下るほど事例が多くなることは分かっているが、今回は取り上げる余裕がなかった。また、金属は溶かすことでまったく別物に作り替えることができるため、そもそも元

の形を残しつつ別の使われ方をしているのを見つけるのは、極めて難しい。

なお、葬送に関する転用、例えば縄文時代の深鉢や甕、弥生時代の甕や鉢、古墳時代の円筒埴輪、古代や中世の四耳壺などは多数の事例が報告されているが、今回は取り上げなかった。それぞれの先行研究を参考されたい。

さて、転用が起きる背景の一つに、平田は生活様式の変化により不要となった道具が、捨てるに忍びがたく新たな使用方法を与えられた、と考えている。もったいない精神の具現化といえる。さらに平田は、新たな道具が新たな用を生む、としている。

これに対し考古資料では、先に触れた様に、そもそも本来の製作意図、使用目的がよく分からないものが多い。そのため、何を持って本来の目的とは異なる転用と判断するか、我々現代人の解釈一つで、評価が変わる。

果たしてかの頃の人々にも、もったいない精神があったか否か。例えば漁網の土製網足は、縄文時代の大部分は土器片利用で、最初から網足として形作られた有溝土錘は6%程に留まり、網足用の管状土錘は縄文時代末か弥生時代初頭に現れる<sup>(9)</sup>。一方、石鏃や打製石斧の破片を石錘に転用する例は、同時期に確立した器種としての石錘があるので、破片を捨てるのがもったいなくて石錘に転用したのかもしれないが、それにしても類例があまりにも少ない。それ程積極的な理由ではなく、たまたま手元に使えそうな形状をした破片があったので、場当りの使っただけかもしれない。いずれにしろ、縄文時代にもったいない精神を見つけるのは難しい。また、非実用品である縄文時代の玦状耳飾りが垂飾品に形を変えても、装飾品という本質は変わらない。古墳時代の霊力を持った破鏡の利用も、同様である。

さらに、領塚や角南・藤村が指摘する様に、いつ転用されたか、転用の時間差をどう認定するかも問題である。時代が古くなればなるほど、使用時期の限定、製作時と転用時の同時性の認定は困難になる。

一口に考古資料の転用といっても、縄文人、弥生人、古墳時代人、古代人でその意識は違うはずである。今回程度の大雑把な事例紹介では、とても転用の意識の変遷や社会背景にまで迫ることはできない。領塚の考えを紹介することで、まとめて代えたい。

二次利用または転用された遺物は、時代(時期)や地域によって出現頻度が異なっており、それらを体系的に整理することができれば、人間が生み出した物質文化の多様性を明らかにすることができる。(略)二次利用または転用された遺物は、これまで積極的に研究されることはなかったが、それらを時間的・空間的に整理し、体系化することにより、これまでとは違った視点に立って、日本の物質文化史の多様性や独自性を明らかにすべきである<sup>(10)</sup>。

領塚が述べている様に、これまでも多くの研究者がそれぞれ散発的に転用に触れてきている。これらが整理体系化されることで、興味深い新たな研究分野になるのは間違いない。この小論が、領塚の呼びかけに応える一つになれば幸いである。

## おわりに

世は挙げて、「エコ」ブームであり、リサイクル、リユースなる言葉も頻繁に人々の口を突いて出る。ただ、「環境に優しい、地球に優しい」といわれると、ついつい「優しさとやさしさは紙一重」などと皮肉の一つも言いたくなる。人類の長い歴史を振り返ると、自然環境に一番負荷をかけ続けてきたのは、ヒトの存在そのものではないか。もちろん、人の知恵によって守られてきた環境もあるが、差引すればまだまだマイナスが多い。

今回は、考古資料に見られる転用の実例をほんの少し紹介したに過ぎず、とてもその全貌は明らかにはなっていない。今後も折に触れ転用事例を収集し、少しでもその真髄に近づきたい。そのためには、昨今話題のブリコラージュの視点も必要かもしれない。

本学デザイン学部平田哲生先生には考現学の立場から有益な助言を、市川市立考古博物館領塚正浩学芸員には労作を頂きました。また、美濃加茂市民ミュージアム藤村俊学芸員には、情報収集で大変お世話になりました。記してお礼申し上げます。

## 注

- 1 平田哲生・島村 博・岡本信也共著『転用のデザイン 暮らしの宝箱』、野外活動研究会転用研究班、1989年。
- 2 領塚正浩「二次利用または転用された遺物について―物質文化の多様性を探る―」『房総の考古学 史館終刊記念』、史館同人会、六一書房、東京、2010年、p229。
- 3 新村 出編『広辞苑』第二版改訂版、岩波書店、東京、1980年。
- 4 前掲注2論文、pp232・233。
- 5 垂井町教育委員会『美濃国府跡発掘調査報告書3.本文編』、岐阜県垂井町、2005年、p100。
- 6 財団法人愛知県埋蔵文化財センター『土田遺跡』、愛知県、1987年、pp77-81。  
これに似たものを、富山市打出遺跡や道場I遺跡では、囲碁や双六の駒としている。（『特別展 岐阜市・富山市都市交流事業 美濃と越中を結ぶ考古展II 城と都市―遺跡から見える戦国と江戸―』展図録、2010年、p25）。それに対し、岐阜市歴史博物館の土山公仁学芸員によれば、双六といえども当時は子どもの遊びではなく、大人が賭け事の対象にしているため、一瞥しただけでは白黒がはっきりしない様なものを駒に利用するとは考えにくいとのことである。なお、時期は不詳だが、カンボジアの遺跡調査でも同種の陶片加工品を目にしたことがある。地域や時間を越えて共通する利用目的があったのか、単なる収斂現象なのか、興味を持たれる。
- 7 角南聡一郎・藤村 俊「第2説 転用された円筒埴輪―古代人の埴輪に対する意識」『秋篠・山陵遺跡』奈良大学文学部考古学研究室発掘調査報告書第17集、奈良大学考古学研究室、奈良、1998年、pp158-162。
- 8 財団法人岐阜県文化財保護センター『砂行遺跡』、岐阜県、2000年、p171。
- 9 渡辺 誠『縄文時代の漁業』3版、雄山閣出版、東京、1984年、pp14-56。
- 10 前掲注2領塚論文、p239。

## 挿図出典

- 1 - 1 津南町教育委員会『八反田遺跡発掘調査報告書』、新潟県津南町、1984 年、p-29。
- 1 - 2 美濃加茂市教育委員会『仲迫間遺跡発掘調査報告書』、岐阜県美濃加茂市、1995 年、p-8。
  - 2 杉原荘介編『加曾利北貝塚』、中央公論美術出版、東京、1977 年、p203。
  - 3 愛知県教育委員会『朝日遺跡Ⅱ (本文編 2・図版編)』、第一法規出版株式会社、東京、図版 4。
  - 4 前掲注 5 文献、p98・107・108。
- 5 - 2 東京都日の出村文化財保護委員会『岳の上遺跡』、東京都日の出村、1972 年、p40。
- 5 - 3 東京都小金井市教育委員会『貫井』、東京都小金井市、1978 年、p101。
- 5 - 4 小金井市貫井南遺跡調査会『貫井南』、東京都小金井市、1974 年、p120。
- 5 - 5 中津川市教育委員会『落合五郎遺跡発掘調査報告書』、岐阜県中津川市、1988 年、p259。
- 5 - 6 中津川市教育委員会『久須田遺跡発掘調査報告書』、岐阜県中津川市、1991 年、p162。
  - 6 前掲 5 - 5 文献、p97。
  - 7 中津川市教育委員会『阿曾田遺跡発掘調査報告書』、岐阜県中津川市、1985 年、p362。
  - 8 前掲注 6 文献、p83。
  - 9 前掲注 7 文献、p160。
- 10 - 1・2 前掲 5 - 6 文献、p146。
  - 11 前掲 5 - 5 文献、p264。
  - 12 前掲注 8 文献、p172。